

令和 7 年 6 月 12 日現在

機関番号：34519

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2024

課題番号：20K10652

研究課題名（和文）変容的学習としての看護師のプロフェッショナリズム教育プログラムの開発と評価

研究課題名（英文）Development and evaluation of a professionalism education program for nurses on transformative learning

研究代表者

網島 ひづる (Amijima, Hizuru)

兵庫医科大学・看護学部・特別招聘教授

研究者番号：90259432

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は看護師のプロフェッショナリズム形成のための変容的学習理論に基づく教育プログラムを開発し実施・評価することである。

第1段階は熟練看護師を対象に面接調査を行い、そのデータを質的帰納的に分析した結果、プロフェッショナリズムの形成には看護実践の省察が重要であり、看護師の心理的な混乱が省察のトリガーになっていた。それらの結果および変容的学習理論を基にした教育プログラムを開発した。第2段階は教育プログラムによる教育研修を実施し、その学習効果を課題レポートや面接調査のデータから質的帰納的に検討した。その結果、教育プログラムは看護師のプロフェッショナリズム形成の動因となることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、看護師のプロフェッショナリズム形成のための教育のプログラムを開発したことにある。そのプログラムは成人学習理論に基づいて看護実践を省察し、参加者とディスカッションをすることを中心とした内容である。

看護師という専門職者の基本的な資質を醸成するための教育に意識変容学習理論に基づくアプローチができることと評価できたのは、看護学教育研究の発展につながる学術的意義がある。また、今日の医療現場は高齢化社会による医療需要の増加、人材不足などの様々な課題に直面している。それらの課題に対応し、質の高い看護を提供できる人材育成は急務である。そこで開発した教育プログラムは看護師育成の一助になる。

研究成果の概要（英文）： Aim of this study was to develop, implement, and evaluate an educational program based on transformative learning theory to foster professionalism among nurses. In the first phase, interview surveys were conducted with skilled nurses. A qualitative inductive analysis of the data revealed that reflection on nursing practice plays a crucial role in the development of professionalism, and that psychological dilemmas experienced by nurses often serve as triggers for such reflection. Based on these findings and transformative learning theory, an educational program was developed. In the second phase, the educational training was conducted, and its learning outcomes were qualitatively and inductively examined through data from assignment reports and interview surveys. We concluded that the educational program serves as a catalyst for the development of professionalism among nurses.

研究分野：急性看護学、看護教育学

キーワード：看護師 プロフェッショナリズム 変容的学習理論 省察 教育プログラム 意識変容

1. 研究開始当初の背景

(1) 看護師のプロフェッショナリズム

看護師は、セミ・プロフェッションと呼ばれていた時代はあったが多くの議論や研究によって徐々にその専門性の基盤を確立し、さらに新しい資格認定制度を確立するなど、その役割と自律性を拡大してきた。プロフェッショナリズムとは「専門職業に固有の態度や行動を特徴づけ、仕事の役割を遂行するために必要な志向である」(Evans, 2008)と定義されている。医師のプロフェッショナリズムに関する論文は、医療過誤に関する問題、市場原理の医療への過度な介入などが背景となって、近年の医学教育関係の学術雑誌に多く掲載されている。しかし、看護師のプロフェッショナリズムに関する研究は少ない。

今日の医療現場は高齢化社会による医療需要の増加、平均在院日数の短縮化、人材不足などの様々な課題に直面している。それらの課題に対応し、質の高い看護を提供できる人材育成は急務である。2017年に文部科学省の委員会にて策定された看護学教育モデル・コア・カリキュラムにおいて、看護職として求められる基本的な資質・能力のひとつとしてプロフェッショナリズムがあげられている。この提言により大学などの多くの看護基礎教育機関においてプロフェッショナリズム形成のための教育内容が盛り込まれた教育課程が展開され始められている。しかし、現行教育において学部教育からの学習の成果を連続し発展させるための取り組みが充分とは言えない。看護基礎教育後の人材育成において専門職の組織集団としてプロフェッショナリズムの形成・強化のための教育は欠かせない。そこで、看護師のプロフェッショナリズム教育としての現行教育におけるモデル的な教育プログラムを開発し提示する必要がある。

(2) 変容的学習理論

意識変容の学習に関する研究としては、メジロー (Mezirow, J.) の変容的学習理論 (transformation theory) やクラントン (Cranton, P.) のおとなの学習者とともに取り組むためのモデル (Model of understanding and promoting transformative learning) がある。メジローは省察的学習と変容的学習とよぶ2つの概念を用いて、意識変容の学習論を展開している。省察とは、自分が経験した出来事について、その場の状況に埋め込まれている本質が何かを見出すことであると言える。自らの経験の意味を十分に理解することは、成人として効果的で合理的に判断するために不可欠である。変容的学習は、学習者がこれまで当然のものとして受け入れてきた認識枠組みを批判的省察により確かな真実性の高いものへと変えていくことである。また、意識変容は自らの問い直しと共に学習者仲間や教育者との語らいが契機となると報告されている (小池源吾, 2004)。

Morrison & Brantner (1992) は、成人の能力開発の70%以上は経験によって説明することができる」と述べる。看護師たちの様々な看護実践経験に対する批判的な省察は、意識の変容を促しプロフェッションとしての自覚や役割遂行への強い志向を生むと考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は看護師のプロフェッショナリズムの形成のための変容的学習理論に基づく教育プログラムを開発し、実施・評価することである。

3. 研究の方法

(1) 研究体制の構築

所属大学および研究協力施設における倫理審査委員会へ申請し実施許可を得た。

② 研究代表者・研究分担者、研究協力者がミーティングをもち研究計画書に沿って、具体的な進め方を検討した。

(2) 第1段階：変容的学習理論に基づいたプロフェッショナリズム教育プログラムの開発

看護師の看護実践の経験とプロフェッショナリズムの要素

熟練看護師(看護師経験15年以上)を対象に半構成的質問紙調査票を用いて面接調査を実施した。面接内容は、プロフェッショナリズムの要素、プロフェッショナリズムの形成につながったと自覚する看護実践経験である。面接調査で得られたデータを質的帰納的に分析した。

② 変容的学習理論に基づいたプロフェッショナリズム教育プログラムの考案

変容的学習理論の省察的学習と変容的学習の考え方との結果を踏まえて、看護実践の経験の省察を中心とした内容の教育プログラムを考案した。

プログラムは、「対象者がジレンマを感じた看護実践を省察し、その内容を他者とディスカッションすることで看護実践の評価や判断に対する自己の準拠枠が広がり・深まりを自覚できる。」を目的に、次のような5つの特徴を有するようにプログラム内容を検討した。

- ・看護師の心理的な混乱を引き起こした看護実践経験を問い直す。
- ・看護実践経験の省察は実践状況と看護師本人の感情を区別して分析・解釈する。
- ・経験した実践状況における看護師の感情について積極的に対話の機会を設定する。
- ・学習者である看護師同士のディスカッションは多くの時間を設定する。

・ディスカッションをサポートするファシリテータを配置する。

プロフェッショナルリズム教育プログラム実施に必要な教材を作成した。

<看護実践の振り返りシート>は看護師のプロフェッショナルリズムの認識、心理的な混乱を引き起こした看護実践体験の具体的な描写、本実践経験を選択した理由、状況の分析・評価、学び、学びの応用計画などを記載できるシートを作成した。自己の看護実践経験を具体的に振り返られるように事実と経験の解釈・分析を区別して記述できるように構成した。

<学習目標の自己評価票>は本プログラムの目標に沿って、自己の到達度を段階評価するとともにその根拠の記載する

<ディスカッションの進め方ガイド>

プログラム内で実施するディスカッションは参加者が、主体的に協力して対話をすすめていけるようにガイドを作成した。step1 から step5 の段階的なディスカッションの具体的な手引きを記載した。

<看護師のプロフェッショナルリズム構成要素に対する自己評価票>

現在の自己のプロフェッショナルリズムの能力について、患者・看護師関係構築能力、省察能力、時間管理能力、医療者間関係構築能力の4要素、38項目で構成する質問に対して5段階評価回答することで自己評価できる質問紙を作成した。

<講義のための資料>「プロフェッショナルリズムとは」、「省察とその方法」、「準拠枠とは」、「経験学習支援とは」などについて導入内容の資料を作成した。

(3) 第2段階：変容的学習理論に基づいたプロフェッショナルリズム教育プログラムの実施・評価

プロフェッショナルリズム教育プログラム実施体制の構築

教育プログラムの実施体制はプログラム運営者3名、ファシリテータ4名で構成した。

実施6か月前から月1回の検討会議を実施し、実施内容・方法およびファシリテータの役割等について検討を重ねた。本プログラムにおけるファシリテーションの目標は、「参加者の心理的な緊張を解き、安心して協力的にディスカッションができるような雰囲気を作ることができる。さらに、受講者がこれまでの看護実践経験の省察を主体的に・論理的に行え、看護実践の評価や判断における自己の準拠枠の傾向に気づき準拠枠を広げることができるよう助言できる」と設定した。

② プロフェッショナルリズム教育プログラムのガイダンス（事前・事後課題の説明を含む）

教育プログラム実施1か月前に、参加者へ本教育プログラムのガイダンスを行った。ガイダンスの内容は、変容的学習、準拠枠、看護師のプロフェッショナルリズムなどの概念、本プログラムの目的・目標、内容・方法、留意事項などについて説明した。また、プログラム参加に向けて事前・事後学習について説明した。事前学習の課題レポートはプログラム実施の1週間前までの提出を求めた。

プロフェッショナルリズム教育プログラムの実施

研究協力施設の看護師を対象に教育プログラムの参加者として新人看護師（経験年数3年未満）・中堅看護師（経験年数5-6年）の各5-7名を募集した。

新人看護師・中堅看護師を対象に開発したプログラムによる教育研修を所属大学において、対象を変えて同じ内容を2回実施した。

プロフェッショナルリズム教育プログラムの評価

プロフェッショナルリズム教育プログラムの評価は、参加者の看護実践の経験に関する課題レポートの記述内容、看護師のプロフェッショナルリズムに対する自己評価の内容、プロフェッショナルリズムの認識の変化、学習目的の到達度、プログラムへの意見に関する面接調査で得られたデータを質的帰納的に分析した。さらに、役割を担ったファシリテータに対して、プログラム中のファシリテーションやプログラムに関してグループ面接を実施し、データを質的帰納的に分析した。

(4) 倫理的配慮

研究参加を依頼する際の配慮

研究対象者は参加募集により確保した。対象者には研究の意義、目的、方法などを書面で詳しく説明した後、文書で研究の同意を得た。対象者には研究の参加は自由意思であること、研究に参加しない場合や途中で参加を拒否する場合でもなんら不利益を被らないことを説明した。特に、本研究に参加しなくても職務・評価には一切関係ないことをあわせて説明した。研究実施途中でも参加同意を撤回できることを説明し、撤回書に関する説明も同時に行った。

② プロフェッショナルリズム教育プログラムへの参加および面接調査に対する倫理的配慮

得られたデータの漏洩がないように管理・保管は徹底した。また、データは研究成果を公表することに対する承諾を対象者から得た。研究成果を公表し、規定の保管期間が終了したのちに、紙データはシュレッダーに、電子データ（画像データを含む）は中身が読み取れない状態にして破棄する。教育プログラム実施および面接の時期、時間などは看護業務に支障をきたさないよう十分に配慮して設定した。また、本研究に参加する研究対象者には、事前に守秘義務（他者の発言・学習状況について等）を守ることに説明し承諾を得た。

4. 研究成果

(1) 熟練看護師の捉えるプロフェッショナリズムの認識

熟練看護師（5名）が捉えるプロフェッショナリズムの認識は、＜専門的知識を活かして看護を実践する＞＜倫理的な姿勢で寄り添う＞＜時間を意識した業務調整・管理をする＞＜多職種と効果的に協働する＞＜看護師の役割を省察し続ける＞＜看護師である自己の成長を意識する＞などの6カテゴリが抽出された。

また、熟練看護師が語ったプロフェッショナリズムの形成につながったと自覚する看護実践経験の一部を表1に示した。看護師の心理的な混乱を引き起こすジレンマが看護実践の省察のトリガーになっていた。

表1 熟練看護師の看護実践経験の内容

経験時期	対象者	看護実践経験の抜粋
経験年数 1年まで	F-1	集中治療という、これまでにほとんど大学で習ってきていない内容の学習が求められたこと。また、何も分からない状態で、 急変や、死に至る患者 を目の当たりにして、自分はその中でも出来ない、ただ見ているだけという現実を突きつけられた。 この時点で、(2)の能力へと繋がったかどうかは分からないが、集中治療に必要な基本的知識を学習し、先輩看護師に報告、足りていない部分のフィードバックを受けるという、学習のプロセス(勉強方法の基盤)が出来た。
	H-1	看護師免許取得後、1か月以内に初僚デビューをしたときの 心肺停止患者の対応 で、できることとできないことすら見極められない自分と、心停止の患者、治療にあたる医師をフォローしていた先輩看護師に支えられ、学校で学んだだけでは看護師として務まらない、もっと専門分野の勉強が必要だと実感した。
経験年数 5年まで	G-1	体調を崩し3年目で休職したことです。 仕事ができなくなったこと で、自分自身が仕事がどれほど自分にとって大切であり、好だったかということを知りました。未熟な自分を看護師として成長させてくれた先輩、特に患者さんに対する感謝の気持ちとともに看護師として必ず成長したい、良いケアが提供できる看護師になりたいと思いが看護師としての姿勢を支えてくれたと思います。
	H-1	維持透析をして、腎移植もしたけどうまくいかず、再度透析導入となり長期間透析を受けながら自己管理していた方が、間質性肺炎になり、人工呼吸器装着した。血圧や食事といった自己管理をされていて、私の提案は、 自分が納得しないと受け入れてもらえず、看護師として信頼されないと対象者に受け入れてもらえないという経験 をした。対象者を尊重すること、ニーズをとらえること、受け入れてもらえる姿勢や態度。回復には、患者の力が必要であること、患者の力を査定できる力。

(2) 開発した変容的学習理論に基づいた看護師のプロフェッショナリズム教育プログラム

目的

対象者がジレンマを感じた看護実践を省察し、その内容を他者とディスカッションすることで看護実践の評価や判断に対する自己の準拠枠が広がり・深まりを自覚できる。

② 目標

- ・看護実践をプロフェッショナリズムの視点で主体的・論理的に省察を行うことができる。
- ・看護実践の振り返りにおける評価や判断の準拠枠の傾向に気づくことができる。
- ・看護実践の振り返りにおける評価や判断の準拠枠を広がりのある思考の枠組みに変化させることができる。
- ・看護のプロフェッショナルとして成長するための課題を明確にできる。

対象

Aグループ：看護師5年目以上 7名程度

Bグループ：看護師5年未満 7名程度

事前・事後学習

- ・課題レポート：これまでの看護実践において“プロフェッショナルとしての自覚を揺るがした”と思う看護実践をあげ、シートにそって振り返り、その内容を記述する。
- ・教育プログラムへの参加動機・参加意欲を200字程度で記載する。
- ・研修当日のまとめの時間に「学修目標に対する到達度の自己評価」を指定用紙に記述する。
- ・受講前、受講後1週間以内と3か月後の2回、「看護師のプロフェッショナリズムの構成要素に対する自己評価」の各項目の問いに対し段階評価を回答する。

具体的な進行と内容

時間	内容および方法
30分	本プログラムに関する説明 (A,Bグループ合同) 目的・目標 ②留意事項 ③内容・方法 タイムスケジュール その他
45分	講義 (A,Bグループ合同) ・プロフェッショナリズムとは ・省察とその方法 ・準拠枠とは ・経験学習支援とは
90分	ディスカッション (A,Bグループ別) ・進行は参加している研究対象者が主体で行う。 *ディスカッションの進め方ガイド沿って行う。

60分	<p>以下の3点(①~③)について話し合う。</p> <p>事前に課題レポートとして各自がまとめてきた「看護実践の振り返りシート」の内容を説明する。</p> <p>② の実践事例から、グループでディスカッションする1事例を選択する。 * 経験した本人の希望やグループメンバーの関心などを考慮して決める。</p> <p>③ 選択した事例に関して以下の視点でディスカッションを行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ プロフェッショナルの視点から実践した看護に関して、本人が述べた振り返りの内容について、「同意する点」や「異なる点」、「現在の段階で気になる点」などについて意見交換を行う。 ・ 特にメンバーは事例を提供した本人が分析・評価した内容とは異なる視点での意見を述べる。 ・ 経験した時の看護師の感情についても積極的に語り合う。 ・ 意見を述べ合うことを通して、プロフェッショナルとしての看護師とはどうあるべきかの自己の考えや思いを深める。 ・ 振り返り、学んだことを次にどのように活かすのかを意見交換する。 <p>自己の看護実践事例の振り返り(個人で)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自己の看護実践事例について検討する。 各自が看護実践の振り返りシートの自己の看護実践事例を振り返る。 <p>② 学びをこれからの実践にどのように適応するのか。学びの活用場面について考える。</p> <p>②について記載用紙に記入する (A,Bグループ合同)</p>
60分	<p>学んだことを語り合う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 午前中の学びおよび自己の実践事例の省察結果などを発表し、意見交換を実施する。
40分	<p>まとめ ・学修目標の評価と学んだことを記入する 今後に向けて自己の課題を明確にする。</p>

(3) 変容的学習理論に基づいた看護師のプロフェッショナリズム教育プログラムの評価

研究対象者は経験年数2-4年6名、5-6年7名の計13名であった。所属病棟はICU、EICU、HCUなどのユニット系、外科、内科、地域包括ケア病棟などであった。

② 事前に提出された課題レポート(看護実践の省察)で取り上げられた看護実践経験は、プロフェッショナリズムの認識の6カテゴリに含まれており、看護師本人の感情になんらかのインパクトを与えた看護実践経験であった。

プログラム実施後の面接調査

プログラム受講後の研究対象者の教育プログラムに対する認識は、<看護実践の経験の意味をより深く解釈・分析できた>、<看護実践に対して研修前の自己評価と異なる見方ができた>、<他者と話し合うことで経験した時の自己の複雑な気持ちが整理できた>、<他者と話し合うことで経験した時の他者の思いに共感できた>、<今回の話し合いで得た学びは次の看護実践に活かすことができる>などの5つのカテゴリに分類された。そのうち<他者と話し合うことで経験した時の自己の複雑な気持ちが整理できた>には、「ディスカッションを通してあの時の気持ちをいくつかの角度から振り返ることで自分のこだわりに気がついた」との語りが含まれていた。また、<他者と話し合うことで経験した時の他者の思いに共感できた>は、ほぼ5-6年の中堅看護師の語りであった。看護師は実践経験を重ねることで、他者の経験した看護実践の状況やその時の患者・家族および看護師の気持ちが、自己のこれまでの経験と組み合わせ、同じ経験をしていなくてもその状況を思い描き、他者の思いを共有することができていた。これは実践経験を省察し、他者と対話することによる得られる効果と考えられた。この効果は看護師のプロフェッショナリズムの要素である人間性の涵養につながると考えられた。

ファシリテータのグループ面説調査

今回のファシリテータのグループ面接では、ファシリテータの役割を担った対象者から気づきを促すファシリテーションの難しさが多く語られた。本プログラムはファシリテータの力量も問われると考えられることから事前の準備教育が重要と考えられる。

質的データの分析結果から、変容的学習としての看護師のプロフェッショナリズム教育プログラムは、看護師として成長するために重要な基本的な資質・能力のプロフェッショナリズムの形成の動因となる学習プログラムのひとつであることが示唆された。

<引用文献>

Evans, L. . Professionalism, professionalism and the development of education professionals. British journal of Educational Studies, 2008, 56(1), 20-38

② 小池源吾, 志々田まなみ, 成人の学習と意識変容、広島大学大学院教育学研究科紀要、第三部、第53号、2004、11-19

Morrison, R. F. & Brantner, T. M. 1992 What enhances or inhibits learning a new job? A basic career issue. Journal of Applied Psychology, 1992, 77(6), 926-940

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山田 千春 (YAMADA Chiharu) (00510869)	園田学園女子大学・人間健康学部・准教授 (34516)	
研究分担者	貞永 千佳生 (SADANAGA Chikase) (10600182)	大阪成蹊大学・看護学部・講師 (34437)	
研究分担者	荻野 待子 (OGINO Machiko) (20420747)	兵庫医科大学・看護学部・講師 (34519)	
研究分担者	笹川 寿美 (SASAGAWA Hisami) (60322898)	兵庫医科大学・看護学部・准教授 (34519)	
研究分担者	常見 幸 (TUNEMI Sachi) (80425123)	兵庫医科大学・看護学部・准教授 (34519)	
研究分担者	重松 諒承 (SHIGEMATU Ryosuke) (30967344)	兵庫医科大学・看護学部・助教 (34519)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------